

第36回海外子女文芸作品コンクール「地球に学ぶ」

クラーク記念国際高等学校賞「作文」の部

プラハ日本人学校 中学部2年 相馬堅志朗

『そんなの関係ある！』

僕は、去年の立からチェコ共和国の首都プラハに滞在している。観光で様々な都市を訪ねたが、名所の置物を買うのがいつしか我が家の定番になった。ある旅行から帰った時のこと、置物が増えすぎて、もともと置いていた台についに乗らなくなってしまった。これを機に、僕は一つひとつの場所での出来事を思い出しながら、良い印象をもった順に、観光地の置物を窓辺に並べることにした。そして今、最も先頭にあるのはフランスの歴史ある修道院モン・サン・ミッシェルの置物だ。

なぜ印象に残っているのか。それは多分、モン・サン・ミッシェルについて詳しく知ることができたこともあるが、新しい何かに気付けたような気がしたからだと思う。

それは、モン・サン・ミッシェルに向かうツアーに参加し、巡礼者が食べていたというあまり味気のないオムレツを食べている時のことだった。

「坊やは今どこに住んでいるの？将来ユネスコなんかで働いてみたらどうだ？今住んでいる国の言葉でも頑張って勉強してみたらどうだい？」

と、ツアーガイドのおじさんに言われた。何気ない普通の会話だったが、その時僕が複雑な表情をしていたと、あとで父に一言言われた。

そのおじさんは、フランスの文化財について調べており、フランス語も流暢に話していた。また、目が合うたびに、

「坊や。頑張ってるね！君の時代だよ！」

と何度も言ってくれた。坊やと呼ばれたことに幾分の抵抗はあったが、何をするのかほとんど知らない「ユネスコ」という機関に興味を持った。

調べてみると、ユネスコは教育・科学・文化を通じて、各国の協力を促し、平和に貢献する国際連合の機関であること。そして、世界遺産の登録について決議しているのも、この機関であることが分かった。ここで働くためには、英語が喋れるのは当然で、プラスもう一ヶ国語くらいはできた方がいいらしい。英語が苦手で、アメリカから来た友達に少々コンプレックスを抱いていた僕にとっては、とても高い壁に思えた。

僕は最初から、英語への苦手意識があった。だから、せいぜい英語だけが分かって何とか喋れるようにでもなれば充分だと思っていた。それより先は自分には関係ないと思っていた。

父や母が、ときどきこちらの人達と会話している。楽しそうに話している時、真剣に話している時……。そういう時僕は、横で頬杖をついているしかなかった。私は、この広いヨーロッパ

パの中で日本語を喋れる人としか話せない。そういう事実を痛感した時、僕は必ずと言っていいほど父母にこう言っていた。

「英会話をただ聞くためだけに、なぜついて行かないといけないんだ！」

考えてみると、こんなにもったいないことはない。この人は何を言おうとしているのだろうとも考えず、ただつまらないと言っていたのだから。それは学ぶ姿勢としてだけでなく、真剣に話す人に対する態度としても良くなかったと思う。

だが、フランス語を使いこなしモン・サン・ミッシェルに住む人達と楽しそうに会話し、詳しく説明するおじさんを見ていると、英語以外は無関係だと思っていたが、今から諦めることはないだろうと思えたのだ。もちろん、英語を深く極めるのもいいと思うが、世界には六千八百もの言語があるという。

現在、僕が通っているプラハ日本人学校にはドイツから来た転校生がいる。友達になり、いくつかのドイツ語を教えてもらった。あまり使わない単語を……。もちろん、実践的な単語も少しは覚えた。例えば、「ヤー、リヒティッヒ」。英語で言うと、「ザッツ・ライト」、チェコ語で言うと「ト・イエ・プラウダ」。意味は同じだが、雰囲気微妙に違う。僕はドイツ語の響きが好きで、友達と言ひあって喜んでいる。こんな違いを見つけると、言語を学ぶのが面白くなってくる。

話をモン・サン・ミッシェルに戻そう。モン・サン・ミッシェルは、ベネディクト会という修道会に所属する、八世紀の初めにできた建物だ。ベネディクト会とは、服従・清貧・純潔をモットーに純粋な信仰を目指した修道会である。

修道士達が食事をしていたという部屋があり、そこも見た。おじさんは、修道僧達が食事しながら聞いたというベネディクト会の会則について説明してくれた。その会則は日にちによって内容が違ったそうだ。そして、おじさんは、実際にその日に読まれていたという会則を当時のフランス語で読んでくれた。おじさんの声は、石造りの部屋に響いた。その声は、修道僧達の生活の質素さが伝わってくるような悲しい響きだった。

「私は、この会則の書かれた本を、いつも持ち歩いているのです。昔のこの日に修道僧達が何を聞いていたのかを感じたいからです。」読み終えたあと、おじさんはそう言った。

聞いた時はピンと来なかったけど、あとになって考えさせられることがあった。意味を知りたいのなら、会則を訳したものを読めばいい。しかし、当時の雰囲気はフランス語でなければ感じられないだろうと思った。

古今和歌集の序文に「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」とある。これは、「やまとうた」だけでなく、すべての表現に言える話だろう。心は形に残らない。言葉にすることで、初めて相手に伝わるのだ。つまり、「言葉は心そのもの」なのだ。翻訳された言葉でも、心が伝わらない訳ではないだろうが、その人が発した言葉に直に触れることができれば、もっとその人の心に近づけるのではないだろうか。

プラハ日本人学校には、チェコ文化理解という授業がある。授業でチェコの歴史について学ぶこともあり、チェコ語の歴史についても学んだことがあったのを思い出した。チェコはもともと

ボヘミア王国として繁栄していた。しかし、十六世紀初期に戦争に敗れ、公の場では、チェコ語を使うことが禁じられてしまった。そのような状況の中、人形劇場のみは文化として認められチェコ語を話すことができた。チェコ語を愛する人々は、何としてでも後世に残そうと、子ども達に人形劇を通してチェコ語を継承した。また、大人達も劇を見に来ていたため、いつしかそこは、大人達の情報交換所ともなった。このようにして、約三世紀が過ぎたころ独立し、チェコ語をまた喋れるようになったという。言葉には人々の思いが詰まっているのだ。

どんなものも存在するのは、意味があるからだ。それなのに、「そんなの関係ねー！」と切り捨てていったら、自分の視野は狭くなってってしまう。すべてのものに意味がある。「そんなの関係ある！」のだ。振り返ってみると、僕は面倒くさくなるとすぐ適当に済ませて終わらせようとしていた。

しかし、最近少し自分が変わってきたように思う。今でも英語はあまり喋れないが、父や母がこちらの人と英語で話している時、分かる単語をつなげて何を話しているのかを想像するようになってきているのに気がついた。

学びには果てがない。どこまで学んでも次の問題が出てくるのだ。それを関係ないと思うか、関係あると思うかで自分の得られるものが違ってくると思う。果てがないといわれると辛いイメージがあるが、工夫次第では楽しむことができるかもしれない。

僕は、よく耳がいいと言われる。僕は、トラムのアナウンスを聞いて発音してみたり、人のモノマネなどをして人に笑ってもらったりするのが大好きだ。考えてみるとその時には、面倒くささを感じたり、早とちりをしたりはしていないと思う。理由は多分、それを楽しんでいるからだと思う。まずは、英語でモノマネをして、イギリス人やアメリカ人などを笑わせるのを日課にしてみようか。